

かなはいつ、どのように学ばせるか

それでは、“かな”はいつ、どのように学ばせるか、と言いますと、漢字を二、三百字覚えさせた後、次のようにして教えることにしています。

すでに知っている“白、赤、青、雪、花、空”をつなぎ合わせて、“白い雪、赤い花、青い空”という言葉にして、これを幼児に与えるのです。これらの言葉は、すでに知って使っているものですから、すぐに“い”を理解し、覚えます。

つまり、幼児たちは、“白い、赤い”という言葉を使っているのですが、ただ、言葉を分析して、“赤＋い”という関係にまで理解が及んでいないのです。だから、言葉としてすでに使っている“赤い花”を、漢字とかなとで書き表わしたものを見せてやれば、すぐに“い”という音声と、その音声を表わしたかな文字とを認識し、理解します。

そこで、幼児は、言葉には「白、赤、花、……」のように意味、内容のある言葉と、“い”のように意味、内容のない言葉とがあることがわかるようになるのです。

こうして、「海は広いな。大きいな」というような文に進んでいきますと、

“海、広、大”といった概念をもった字に対して、“は、い、な”というような単なる音声を表わす文字の存在に気付く、漢字は主として概念や観念を表わすものであり、かなは単なる音声を表わすものであることを理解するのです。

これは、現実の文章の表記の事実から、体得するものであって、理屈で理解させるものであってはなりません。言葉や文字表記というものは、理屈で理解したのでは何にもなりません。身について、習慣となり、考えないで言葉となり、表記となるものでなければなりません。

初め「うみはひろい」と学習し、後で「海は広い」と改めるようでは、身についたものになるはずがありません。